

大学生の不登校傾向に影響を及ぼす心理的要因

堀井 俊章

Psychological Factors on University Students' Tendencies
toward Non-attendance

Toshiaki HORII

I 問題と目的

大学生の不登校に関して小柳（2014）は、「最近では、「大学生の不登校」という言葉は一般的に使われ、論文のタイトルでも見かけるようになった」と指摘している。今日大学生の不登校問題は、学生相談に従事する専門家をはじめ、広く大学関係者の間でも注目を集めるようになってきた。

堀井（2013a）は大学生の不登校に関する従来の研究成果について、「不登校の大学生数」「不登校のタイプ・背景要因」「不登校の事例・対応」という3つの観点からまとめている。昨今の不登校研究の特徴としては、実際に不登校になった者を対象とした研究だけではなく、不登校傾向（大学の正課活動に対する回避傾向）（堀井, 2013b）という概念に基づく研究も展開されはじめています。

堀井（2013b）は大学生の不登校傾向を測定する「大学生不登校傾向尺度」を開発し、不登校傾向の実証研究を促進する契機をつくりあげた。尺度の項目は表1の通りであり、尺度は「登校回避行動」と「登校回避感情」の二つの下位尺度から構成されている。「登校回避行動」は「欠席しがちな授業がある」「なんとなく大学に行かないことがある」などの項目から構成され、大学への登校を回避する行動的側面を表す。「登校回避感情」は「朝、今日は大学に行きたくないと思うことがある」「参加したくない授業がある」などの項目から構成され、大学への登校を回避する感情的側面を表す。

大学生不登校傾向尺度と関連尺度を用いた分析の結果、不登校傾向は、「メンタルヘルス（例：うつ状態）」、「適応（例：精神的回復力の低さ）」、「パーソナリティ一般（例：調和性の低さ）」、「自己・自我（例：同一性拡散）」、「動機づけ・認知（例：自己充實的達成動機の低さ）」、「対人関係（例：孤独感）」といった心理的特性と関連性をもつことが示唆された（堀井, 2015）。しかし、それぞれの心理的特性が不登校傾向の要因となっていることを明確に裏付けたものではなく、両者の相関関係が見られたことを示したに過ぎない。

表 1 大学生不登校傾向尺度の項目 (堀井, 2013b)

尺度 1 : 登校回避行動	
1	欠席しがちな授業がある
2	なんとなく大学に行かないことがある
3	大学を休みがちである
4	授業を遅刻しがちである
5	大学に行きたいけれどもなぜか行けないことがある
6	一日の授業がすべて終わる前に帰宅することがある
尺度 2 : 登校回避感情	
1	日曜日の夜、明日 大学に行きたくないと思うことがある
2	朝、今日は大学に行きたくないと思うことがある
3	大学をしばらく休みたいと思うことがある
4	一日の授業がすべて終わる前に帰宅したくなることがある
5	大学に行くのは楽しい (注: 逆転項目)
6	参加したくない授業がある

本研究では、不登校傾向にある大学生の内省 (不登校傾向になった理由・原因) から得られた情報をもとに、不登校傾向の心理的要因を測定する尺度を新たに構成する。そして、その不登校傾向要因尺度と大学生不登校傾向尺度との関連性について、共分散構造分析によるパス解析を行い、大学生の不登校傾向に影響を及ぼす心理的要因を検討することを目的とする。

II 研究 1

1 目的

大学生の不登校傾向の心理的要因を測定する尺度項目を構成し、因子パターンおよび信頼性について検討することを目的とした。

2 方法

(1) 調査対象と期日

4年制大学3校の大学生461名 (平均年齢19.8歳、*SD* 1.61、男子223名、女子238名) を対象とし、講義時間を利用して、担当教員の教示のもと集団法による質問紙調査を実施した。調査期日は2011年1月であった。調査時には調査の趣旨を文書および口頭で十分に説明し、合意を得た者を対象とした。

(2) 質問紙の構成と仮説モデル

まず予備調査として大学生718名 (平均年齢19.7歳、*SD* 1.23) を対象に大学生不登校傾向尺度 (堀井, 2013b) を実施した (7件法)。下位尺度の「登校回避行動」の平均値

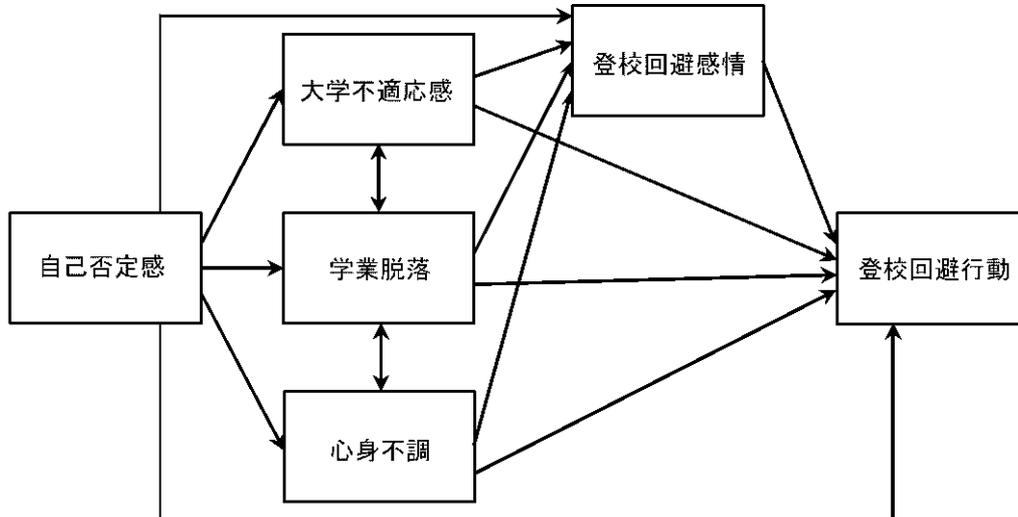


図1 大学生の不登校傾向に影響を及ぼす心理的要因（仮説モデル）

は8.03 (SD 7.11)、「登校回避感情」の平均値は18.97 (SD 7.52)であった。今回の調査ではそれぞれ平均値+1.5 SD 以上の高得点群（「登校回避行動」55名、「登校回避感情」44名）を不登校傾向者とみなし、そのうち面接協力者30名を対象に不登校傾向の理由・原因について聴取した。

聴取内容をもとに質的記述的分析を行った。すなわち、不登校傾向の心理的要因と推測される短文を138個作成し、カテゴリー分類を行った結果、「自己否定感」「大学不適応感」「学業脱落」「心身不調」の4カテゴリーが抽出された。4カテゴリーと不登校傾向（「登校回避行動」「登校回避感情」）の関係性を示した仮説モデルを図1に示す。

図1を見てわかるように、「自己否定感」が「大学不適応感」「学業脱落」「心身不調」を介して間接的に不登校傾向（「登校回避行動」「登校回避感情」）に影響を及ぼす経路（登校回避感情は登校回避行動に影響を与える）と、「自己否定感」が直接、不登校傾向（「登校回避行動」「登校回避感情」）に影響を及ぼす経路を想定した仮説モデルが構築された。

次に138個の短文についてワーディング処理を施し項目の適正化を行い、臨床心理士3名が高い内容的妥当性を有すると判断した40項目を大学生不登校傾向要因尺度（予備尺度）として構成した。各項目に対する回答は、「非常にあてはまる（6点）」「あてはまる（5点）」「ややあてはまる（4点）」「どちらともいえない（3点）」「ややあてはまらない（2点）」「あてはまらない（1点）」「全然あてはまらない（0点）」の7件法で求めた。

3 結果と考察

(1) 大学生不登校傾向要因尺度の因子パターン

大学生不登校傾向要因尺度（予備尺度）40 項目の基礎統計量を算出し、不良項目がないことを確認した上で因子分析（主因子法プロマックス回転）を行った。すなわち、因子数の抽出基準を固有値 1.0 以上とし、因子の解釈可能性を考慮した上で4 因子を抽出しプロマックス回転を行った。一つの因子にのみ負荷量が .40 以上となるように項目の取捨選択と回転を繰り返した。その結果、表 2 を見てわかるように 37 項目が当該因子に負荷量 .40 以上となり単純化された因子パターンを示した。4 因子での累積寄与率は 50.6% であり、因子間の相関係数は .36— .56 と中程度であった。

第 1 因子は、「自分が嫌いである (.73)」、「自分は生きる価値がない (.71)」などに高い負荷を示した。負荷量 .40 以上の項目は、自己嫌悪、自尊感情 (self-esteem) の低下、自信喪失、希死念慮、自傷衝動、対人恐怖心性、不安などを表す。全体的に、自己を否定する感情価に彩られていると考えられるため、「自己否定感」と命名された。

第 2 因子は、「この大学に満足している（逆転項目） (-.72)」、「学生生活がつまらない (.69)」などに高い負荷を示した。負荷量 .40 以上の項目は、大学や学生生活への満足感・充実感・期待感・興味関心の低下、アパシー傾向、就学の目標や意義の喪失、転学・退学希望などを表す。総じて、大学に適応できない状態によって引き起こされる態度や価値づけを表すと考えられるため、「大学不適応感」と命名された。

第 3 因子は、「勉強がきらいである (.63)」、「授業のスピードについていけない (.58)」などに高い負荷を示した。負荷量 .40 以上の項目は、勉強嫌い、勉学への意欲喪失、授業の理解困難、学業からのドロップアウトなどを表す。これらの内容を踏まえて、「学業脱落」と命名された。

第 4 因子は、「からだがだるい (.73)」、「いつも疲れている (.72)」などに高い負荷を示した。負荷量 .40 以上の項目は、心身の疲労感・だるさ・倦怠感、不眠傾向、抑うつ感、立ちくらみやめまいなどを表す。総じて心身の調子の悪さを表すため、「心身不調」と命名された。

(2) 大学生不登校傾向要因尺度の基礎統計量と信頼性係数

上記の因子分析後の 37 項目について、因子別に当該因子に負荷量 .40 以上を示した項目のまとまりを下位尺度項目とし、項目の粗点の合計を下位尺度得点とした。下位尺度別に項目分析 (G-P 分析と I-T (項目—全体) 相関分析) を行い、すべての項目が有意であることを確認した上で、Cronbach の α 係数を算出した。表 3 に下位尺度の基礎統計量と α 係数を示した。 α 係数は .76— .89 となり、十分な値を示した。

以上より、大学生不登校傾向要因尺度は全 37 項目、4 つの下位尺度から構成され、高い信頼性 (内的整合性) をもつことが確認された。

表2 大学生不登校傾向要因尺度の因子パターン

	因子1	因子2	因子3	因子4
自己否定感				
1) 自分が嫌いである	.73	-.06	.14	-.06
2) 自分は生きる価値がない	.71	.13	-.02	-.12
3) なんとなく人がこわい	.68	-.04	-.01	-.01
4) 死にたくなることがある	.61	.15	-.13	.08
5) 精神的に弱い	.61	-.20	.21	.06
6) 何事も自信がもてない	.61	.11	-.14	.06
7) 自分自身を傷つけたくなる	.60	.07	-.18	.08
8) 漠然とした不安を感じる	.56	.01	.08	.17
9) 今の自分は本当の自分ではない感じがする	.55	.05	-.03	.11
10) 陰で悪口を言われている気がする	.54	-.09	.18	-.04
11) これまでの生き方を変えたい	.51	.20	.09	-.19
12) 頭が働かない	.48	-.12	.26	.10
大学不適應感				
1) この大学に満足している (逆転項目)	.07	-.72	.27	-.06
2) 学生生活がつまらない	.11	.69	-.11	.15
3) 大学でやりたいことがない	.08	.68	.16	-.17
4) 大学は自分が期待していたものと違った	-.10	.67	.03	.08
5) 学生生活が充実している (逆転項目)	-.14	-.67	.05	.03
6) 大学をやめたいと思うことがある	.15	.61	-.11	.03
7) できれば他の大学・学部・学科・専攻等に移りたい	.04	.61	-.05	-.02
8) 何のために大学に行くのかわからない	.12	.59	.19	-.13
9) 興味のもてない授業が多い	-.18	.53	.34	.11
10) 面白くない授業が多い	-.31	.53	.35	.14
11) 明確な目標がないのにとりあえず大学に入ってしまった	.10	.45	.25	-.27
学業脱落				
1) 勉強がきらいである	-.05	.06	.63	.02
2) 勉強する気が起こらない	.01	.10	.63	.06
3) 授業のスピードについていけない	.05	.00	.58	.08
4) わからない授業が多い	.03	-.06	.55	.09
5) 自分は怠け者である	.32	-.14	.46	-.08
心身不調				
1) からだがだるい	.06	-.02	.11	.73
2) いつも疲れている	.07	.04	.04	.72
3) 立ちくらみ、ふらつき、めまいがする	.06	-.02	-.05	.54
4) ぐっすり眠れない	-.05	.03	-.01	.53
5) 日中ねむい	-.05	-.11	.21	.50
6) なんとなく憂うつである	.38	.11	.00	.47
寄与 (他の因子の影響を無視したもの)				
	7.72	6.57	4.94	5.45
因子間相関				
因子1	—			
因子2	.44	—		
因子3	.43	.40	—	
因子4	.56	.36	.36	—

表3 大学生不登校傾向要因尺度の
基礎統計量と α 係数

尺度	$M(SD)$	α
自己否定感	31.67(14.30)	.89
大学不適應感	26.44(12.66)	.88
学業脱落	17.11(5.74)	.76
心身不調	18.45(7.83)	.81

Ⅲ 研究2

1 目的

大学生不登校傾向要因尺度と大学生不登校傾向尺度との関連性について、共分散構造分析によるパス解析を行い、大学生の不登校傾向に影響を及ぼす心理的要因を検討することを目的とした。

2 方法

(1) 調査対象と期日

4年制大学の大学生838名（平均年齢19.8歳、 SD 1.24）を対象とした。性別および学年別の人数は表4に示した。調査は講義時間を利用して、担当教員の教示のもと集団法による質問紙調査を実施した。調査期日は2012年5月～7月であった。調査時には調査の趣旨を文書および口頭で十分に説明し、合意を得た者を対象とした。

表4 調査対象者数

	男子	女子	計
1年生	91	90	181
2年生	115	108	223
3年生	102	99	201
4年生	114	119	233
計	422	416	838

(2) 質問紙の構成

①大学生不登校傾向要因尺度

研究1によって作成された尺度である。

②大学生不登校傾向尺度

先述したように、堀井（2013b）が作成した心理測定尺度であり、大学生の不登校傾向が測定され、「登校回避行動」と「登校回避感情」の二つの下位尺度（各6項目全12項目）から構成されている（表1）。各項目に対する回答は、「非常にあてはまる（6点）」「あてはまる（5点）」「ややあてはまる（4点）」「どちらともいえない（3点）」「ややあてはまらない（2点）」「あてはまらない（1点）」「全然あてはまらない（0点）」の7件法で求めた。

3 結果と考察

(1) 尺度の信頼性

大学生不登校傾向要因尺度の α 係数は、「自己否定感」が .89、「大学不適応感」が .86、「学業脱落」が .76、「心身不調」が .76であった。また、大学生不登校傾向尺度の α 係数は、「登校回避行動」が .85、「登校回避感情」が .82であった。それぞれ高い信頼性（内的整合性）をもつことが再確認された。

(2) 大学生不登校傾向要因尺度と大学生不登校傾向尺度との関連

図1に示した仮説モデルについて共分散構造分析によるパス解析を行った。その結果を図2に示した。

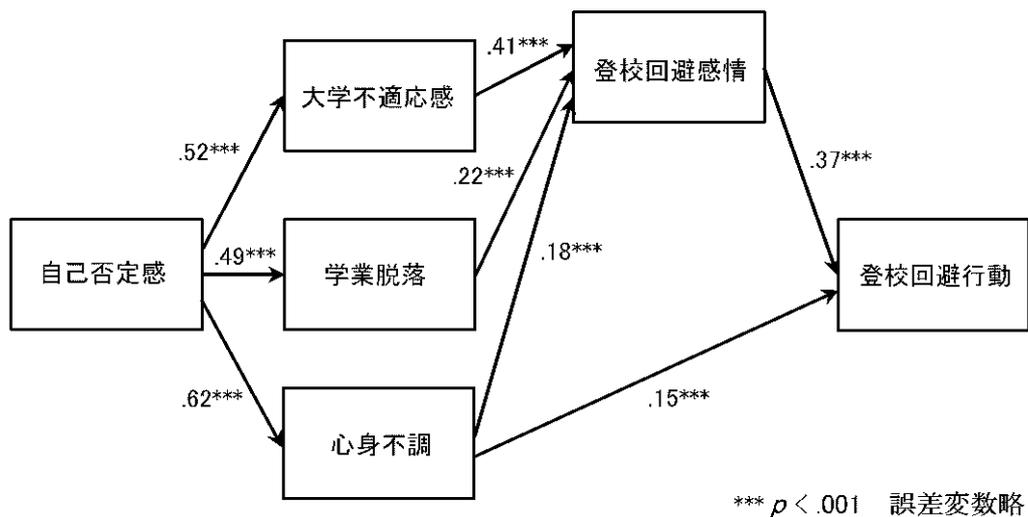


図2 大学生の不登校傾向に影響を及ぼす心理的要因（パス図）

図2を見てわかるように、「自己否定感」は、「大学不適應感」に有意な正の影響 ($\beta = .52$, $p < .001$) を与え、「学業脱落」に有意な正の影響 ($\beta = .49$, $p < .001$) を与え、「心身不調」に有意な正の影響 ($\beta = .62$, $p < .001$) を与えていた。「大学不適應感」は「登校回避感情」に有意な正の影響 ($\beta = .41$, $p < .001$) を与え、「学業脱落」は「登校回避感情」に有意な正の影響 ($\beta = .22$, $p < .001$) を与えていた。「心身不調」は「登校回避感情」に有意な正の影響 ($\beta = .18$, $p < .001$) を与え、「登校回避行動」に有意な正の影響 ($\beta = .15$, $p < .001$) を与えていた。「登校回避感情」は「登校回避行動」に有意な正の影響 ($\beta = .37$, $p < .001$) を与えていた。

モデルの適合度については、 $\chi^2(4) = 8.038$ (*n.s.*)、GFI=.997、AGFI=.984、NFI=.995、CFI=.998、RMSEA=.035であり、モデルの適合性は高いと判断された。なお、性別、学年別に共分散構造分析によるパス解析を行った結果、同一モデルが適合できることが確認された。また、多母集団同時分析を行った結果、性別及び学年間においてパス係数に有意差が見られないことが確認された。

IV まとめと今後の課題

本研究は、大学生における不登校傾向の心理的要因を測定する尺度を因子分析から構成し、その尺度と不登校傾向尺度との関連性について共分散構造分析によるパス解析を行った。その結果、不登校傾向に影響を及ぼす心理的要因を確認することができた。すなわち、因子分析からは、不登校傾向に影響を与える心理的要因として、「自己否定感」「大学不適應感」「学業脱落」「心身不調」の4要因が抽出された。共分散構造分析によるパス解析からは、「大学不適應感」「学業脱落」「心身不調」が不登校傾向（登校回避感情または登校回避行動）を高める直接的要因となること、また、「自己否定感」が、「大学不適應感」「学業脱落」「心身不調」を介して不登校傾向（登校回避感情または登校回避行動）を高める間接的要因となることが判明した。

したがって、学生相談において不登校傾向者に対応するためには、「大学不適應感」「学業脱落」「心身不調」に注意を払うだけでなく、不登校傾向に間接的に影響を与える「自己否定感」にも目を向けることが重要である。「自己否定感」は、これまでの自分を否定し、新たな自分をつくりあげようとする内的な動きを表すものであり、不登校傾向の意味を理解する一つの鍵となる。

小柳(2014)は、「不登校を不適應あるいは病的なものとしてとらえていない。その本質は外的適應を一時的に犠牲にして、内面の組み替えや生き方の変更など内的適應の充実に取り組んでおり、健康な営みである」と指摘している。この言葉を手掛かりにすると、不登校傾向は、外的適應という社会的要請に答えようとしながらも、内的適應という自己(self)の要請にも答えようとする誠実な営みである。端的に言うと、不登校傾向は、大学という外の世界に合わせることの必要性を自覚しながらも、心の深奥から発するメッセージにも耳を傾けようとする姿勢の表れとも考えられる。学生相談の場面では、欠席行動などの表面的な問題行動だけに目を奪われることなく、不登校傾向の意

味を理解し、学生のありようを真摯に受け止めていく態度が望まれる。

文献

- 堀井俊章 2013a 大学生の不登校に関する研究の動向. 横浜国立大学教育人間科学部
紀要 I (教育科学), **15**, 75-84.
- 堀井俊章 2013b 大学生不登校傾向尺度の開発. 学生相談研究, **33**, 246-258.
- 堀井俊章 2015 大学生不登校傾向尺度の開発 (続報). 横浜国立大学教育人間科学部
紀要 I (教育科学), **17**, 115-130.
- 小柳晴生 2014 大学生の不登校をめぐって. 精神医学, **56**, 399-404.